釣れ釣れなるままに

２０１６年思い出の釣行記 PART.　１２

猛者が集う

鹿島釣狂

【札幌忘釣会第１８回大会】

「札幌竿道会」菅原信幸氏から「札幌忘釣会」大会への参加打診の電話が入った。娘の出産等による孫のお守りが峠を越えて、自宅のある士別に戻る予定のため、一も二もなく参加の意向を伝えた。私のとっても竿納めとなるだろう。

冬型の気圧配置が強まり、釣りをするには厳しさを覚悟しなければならないが、この時期にしては比較的釣りのできる内浦湾の山越～石倉である。札幌交綸会と合同大会を組んだ５年間ほど、１１月の大会はこの区域で実施されたが、私の入釣場所はいずれも森漁港に近い所であった。今回の忘釣会は初めての釣り場となる。菅原氏に相談すると、彼もこの釣り場範囲にはあまり入ったことがなく、築港などに入ることが多いという。

「北海道のつり」２００５年１０月、１１月号の釣り場紹介精密釣り場マップを紐解き、グーグルマップと比べながら眺めてみると、落部（栄浜）漁港の左に付いた鉄製桟橋が魅力的な釣り場に思えた。一抹の不安は、その桟橋に車止めの柵等が設置されて、人が入り込めないようになっているような気がすることだ。万が一入れないようなことがあったら、その左の平磯や漁港内に逃げ込まなければならないことも考えられる。釣りバスの中でベテラン釣り師にお伺いを立てながら向かうとしよう。

大会日の天気予報は大変良い。冬型の強い気圧配置のため金曜日まで続いていた台風並の大時化が土曜日には治まり、日曜日は全道的に晴れで気温も高くなる予報だ。

午前中には準備も終えて、少し早めの午後５時に自宅を出発した。そして、飲み物や朝飯等を買うためにビッグハウスに立ち寄った。丁度この時期、お歳暮用の蟹缶詰め合わせセットが並べてあったので、景品にでも使って頂けたらと購入した。

途中、コンビニ弁当で夕食を済ませたが、集合場所には随分と早く着いて、２番目の到

着だった。先行者は、札幌潮鱗会の役員の方で、駐車帯への誘導まで丁寧にして頂いた。そのうちに北海道の釣り会では名の知れた面々ばかりが続々と集まってきた。

バスの一番後ろに指定された座席に座り込むと、その隣が今回案内していただいた菅原氏、その友人の山田秀敏氏、前の座席は、「北海道釣名人会」の越智靖基、山本脩平、渡辺英二氏だった。越智氏は今年度、名人会、竿道会で年間覇者に輝いた新進気鋭の若者である。いや、いや、私は若者とばかり思っていたのだが、彼から「４０才を過ぎました」と打ち明けられた。最近は釣り会のメンバーも高齢化してきて、彼らぐらいの年齢は皆若者にしか見えないのだ。山本氏は２０代独身というから、ほんの洟垂れ小僧（失礼）にしか見えない。

忘釣会世話人代表の篠田秀人（名人会）氏の挨拶に続き、中川弘（潮鱗会）氏の名進行で和気藹々とした会が進んでいった。「参加者は２８名。竿上げ時間は９時です。冬なのでバス停で眠り込んでしまう人がいないようにお願いします。」との言葉に、付近から「俺のことだな」という呟（つぶや）きが聞こえた。最後に「質問はありませんか。」との問いかけに、早ほろ酔い加減の参加者から「なんか歌ってくれ」とのヤジが飛ぶ。中川氏が「演歌は歌えませんが、コブクロならなんとか・・・。」と返すと、「それじゃ、俺の大風呂敷でも広げるか」「お前は３０㎝が５０㎝になるからさしずめ大法螺吹きだがな」との声に、バスの中が爆笑の渦に巻き込まれた。

最近の釣りのことなどを話し合っているうちに、始点である「ドライブハウス金太郎」に着いて着替えをした。そこから釣り場に向かった人もいたようだった。次々に参加者が下り立っていって、栄浜漁港に下りるのは私一人のようだ。目印にしていたドライブイン「やかた」を５００ｍ程進んだところにある三叉路で下ろしてもらった。キャスターに荷物を積んで進んでいくと、栄浜会館があり、そこから更に枝別れした坂道を下って踏切を渡った所で目的の桟橋が見えてきた。グーグルマップストリートビューでは見慣れた風景だ。危険物屋内貯蔵所の前浜が目的の場所である。バスの中で聞いた通り、車止めはあったが低い物で、簡単に鉄製桟橋に乗ることができた。

桟橋の下の海を覗き込むと随分と浅い。波も全くなく、潮も透き通っているので海底が丸見えなのだ。海藻もほとんど付いていない。これは厳しい釣りになるぞと覚悟しながら準備を進めた。

鉄製桟橋。べた凪の海上にはハタハタ網のものと思われるボンデンが沢山浮いていた

桟橋の正面に、鉄製の杭が１０本ほど並んで立っていた。まずは第１投をその杭の右側にゴロ２本ネット仕掛を鋭く振り抜いた。ブチッと鈍い音がした。リールベールが返っていなかったのだ。最初の出だしから仕掛を失ってしまったか、しようがないな、もう一度付け直すかと道糸を巻き始めると竿先がないのに気が付いた。竿先が折れた上に、道糸が切れてしまったので竿先まで吹っ飛んでいったのだ。ブチッとした音にはゴチッとした金属音も混ざっていたのだ。桟橋の角に竿が当たって折れてしまったらしい。近辺に折れた竿が浮いていないかと捜すが、竿先に付けたギョギョライトがプカプカと浮いているだけであった。

準備には慎重を期していたはずだが、今日の絶好の釣り日和と目当てにしていた釣り場に立てたことが自分の気持ちを浮き足立たせていたのだろう。これからの釣りにも心の中が折れてしまいそうだった。自分でやってしまった過ちだから泣くに泣けない。もう少し前に出て竿を振っていたら、１投目だから優しく振り込んでもよかったのになどと後悔ばかりしてもしようがないと、気持ちを切り替えて竿２本体制で打つことにした。

様子を確かめるために今度は慎重に杭の左右にゴロネット仕掛を振り込んだ。アタリもなく時間が過ぎていく。雲も全くなく澄み切った空に星々が瞬いている。正面に見慣れた星がある。北斗七星が右に、左にはカシオペア座も見える。正面の鉄杭の真上には北極星が輝いているのだ。ということは北に向かって打っていることになる。後ろを振り返ると

オリオン座が見える。方向感覚がいつもの逆なのだ。この時期はいつも日高やエリモ方面でオリオンを正面に見ながら釣りをしていた。北斗七星は背後の山並みで隠れて見ることはなかったのだ。

カシオペア座方向に振り込んだ竿にアタリが出た。ようやく出たアタリに慎重を期していると根掛かりさせてしまった。魚が出てくるまでとしばらく待ったが外れてくれない。仕方なく強く引っ張るとズルッと抜けてきた。ゴロバリの親バリに漁師が使うマスバリを使っていた。マスバリは軟らかいのでそれが伸びて外れてきたのだ。カツオを銜えた３０㎝強のアブラコがダブルで上がってきた。

北斗七星側の竿は何度も小さなアタリがあるのだが魚が乗らない。カレイでもいるのかと繊細な仕掛に替えて、塩イソメを付けて振り込んでみた。微妙なアタリに合わせてみるとドンコ（クサウオ）が上がってきた。全くの砂地なのだ。

北斗七星側は諦めて、正面に５本ずつ並んだ鉄杭の真ん中を通して遠投してみた。すぐに小さなアタリがあり小物が付いたが、杭と杭の間に障害物があるらしく、それに引っかかってしまって仕掛を失った。

カシオペア座に向かって打っていた竿にゴンゴンと竿尻が持ち上がる大きなアタリが出た。大きなカジカだったが新調した竿なのでヒョイと桟橋の上に取り込んだ。４５㎝ほどのデップリと太ったカジカだった。同じところに振り込んでから、もう１本の竿もカシオペア座側に置き、１０時方向に遠投した。しばらくしてからその竿に大きなアタリが出た。竿を煽ると乗った。グイングインと竿を曲げる大アブラコ独特の引き込みだ。しかし、途中の障害物に引っかかってしまった。感触からしてロープにでも引っかかってしまったようだ。道糸をゆるめると魚が道糸をズルズルと引き出していく。なんとかロープを越えさせようと挑戦してみたが、最後には仕掛そのものがロープに絡まったらしく、全く動かなくなってしまった。強く引っ張ると抜けてきたが、ハリスが切れていた。

打つ場所が一方向しかしかなくなった。ネット仕掛の中投と同じ方向に１本バリで遠投した。何度か打ち返していると砂地に適度な根があるらしく、その根の所を集中的に打ち込んでいた。その竿にゴツンゴツンと竿全体を揺らす大きなアタリが出た。アブラコかな？途中の根に潜り込まれないように一気に竿を煽り、懸命にリールを巻くとゴボッと魚が浮いた。アブラコではなかった。浮いてしまえば抵抗することもなく、ただただ重いだけのカジカだった。最初に上げたものより少し身長が伸びただろうか。

明るくなってみるとあちらこちらにボンデンが浮いており、網が仕掛けられているようだった。それからは、小アブラコばかりで大物は来なかった。８時には片付け始めた。一番初めに折って竿先がなくなってしまった竿も乱雑にならないように丁寧にトップカバーを被せた。釣りに集中しているときは、あれこれと悔やむこともなかったが、その時はやはり辛かった。丁寧に片付けたので国道に上がったときは８時５０分だった。

国道に上がってバスを待っていると、ドライブイン「やかた」で下りていったはずの北川政道氏がやって来た。「やかた」下では、ハタハタ網のボンデンが浮いていたので釣りに

ならなくて、漁港に向かって歩いてきた。途中、網の入っていない舟揚場があったのでそこでやったがあまりよい釣果は上げられなかったということだ。大柄でいかにも体力がありそうだが、長い距離を歩いてきたせいで汗だくになりながらウエイダーを脱ぎ、スニーカーに履き替えた。彼は、忘釣会１８回大会を記念した１８位のラッキー賞を獲得した。

左から優勝：佐藤貢、準優勝・身長優勝：篠田秀人、３位：中川弘

審査は八雲港で行ったが、大物がぞろぞろと出てきた。優勝は佐藤貢氏だった。栄浜漁港右周辺を攻めて４５㎝級の大カジカを３本揃え、嫁にしたアブラコも４０㎝級２本の大物だった。さすがに名うての釣り師だった。今回の大会に誘ってくれた菅原信幸氏は、釣り仲間の山田氏と石倉漁港の防波堤で焼肉を楽しんだ。一緒に釣りをしていた篠田氏も加わる予定だったが、あまりにも釣りものが無いので、漁港の右に移動すると大物カジカをあげてしまった。それでなんとか嫁になるアブラコをものにしようと外防波堤内を彷徨い歩いた結果、大カジカと大アブラコをあげたのだそうだ。その粘りで身長優勝に加えて準優勝をも勝ち取った。３位は幹事長の中川氏だった。重い荷物を背負っての行軍など全く厭わない体力の持ち主なのだそうだ。

５位の筆者の魚：１３？？点

八雲温泉「おぼこ荘」で一風呂浴びた後に昼食をとった。その会場では賞品が所狭しと並べられ、表彰式が行われた。そして、５位に私の名前が呼ばれて豪華賞品を受け取った。「おぼこ荘」の玄関先を出ようと靴ベラを使って靴を履いた。すると、隣の椅子に腰掛けた人がいたので、その御仁に靴ベラを手渡した。前年度の忘釣会の折に、厚瀬漁港で一緒に竿を出した石川雅人氏だった。彼は、今年になって椎間板狭窄症を患い、満足な釣りができていない。今日も医者に止められていたのだが、痛み止めを処方してもらって、体にはホッカイロを１０枚も張って釣りをしてきた。どんなに辛くても釣りはやめられないのだという。私にとってはそんな猛者が集う大会に参加できたことが何より嬉しいことだった。竿を折ってしまったことにはやっぱり悔いが残ってしまったが・・・。